



きらきら Eyeランド

JA庄内みどり

安全・安心をお届けします。

令和6年2月13日

グリーンプロジェクト情報 第1号

発行：庄内みどり農業協同組合
協力：酒田農業技術普及課

令和6年暖冬が続いております 作業は焦らず、適期作業で好スタートを！

令和6年産米の安定生産に向けた第一歩は健苗育成です。近年、育苗期間の高温により、葉齢の進みが早く移植適期を過ぎた苗がみられます。初期生育確保のため、適期に移植できるよう田植えから逆算し作業計画を立てましょう。

夏の高温・猛暑や、大雨・少照といった気象変動、またフェーン現象により生育後半の稲の活力低下がみられます。天候に左右されない稲づくりを継続するために、積極的な土づくりで地力の維持・向上に努めましょう。

令和6年度 水稻育苗作業計画

作業名	作業月日
塩水選	3月23日(土)~25日(月)
種子消毒	3月26日(火)~28日(木)
浸種	3月28日(木)頃~(4月13日頃播種の場合) ※2週間程度までとし、必要以上に長くしない。
催芽	4月10日(水)~
播種	平坦4月13日(土)~20日(土), 中山間4月20日(土)~26日(金)
田植	平坦5月8日(水)~15日(水), 中山間5月18日(土)~24日(金)

春先は作業が集中します。正確に記録するため、農作業野帳への記帳を忘れずに！！

技、其の一 「ばか苗病」対策のポイント（共通事項）！

■周辺環境

- ①作業場所やその周辺から伝染源となる稲わら、籾殻、米ぬか、粉塵等を十分清掃し、整理整頓する。
- ②前年「ばか苗病」の発生が多かった場合は、種子消毒、浸種、催芽に使用する機器並びに容器等（育苗箱、水槽、催芽機等）はすべて「イチバン」（500~1,000倍液で瞬時浸漬または散布）等で消毒する。（催芽機を消毒する場合は希釈薬液を循環させる）また、マルチや有孔ポリは再利用せず更新する。

■塩水選・種子の準備

①塩水選でより良い種子を！

品種	塩水選の比重	水10ℓ当たりの目安	
		塩(kg)	硫安(kg)
うるち	1.13	2.1	3.0

☆塩水選後は、水道水で良く洗い流しましょう。

☆温湯消毒をする場合は塩水選後、必ず1時間以内に行いましょう。

②異品種の混入に注意して下さい。

※催芽袋の色分けや、名札を付けてハッキリ確認できるようにしましょう。

③催芽袋への小分けは種子量を5kgとし、催芽袋にゆとりを持たせるようにしましょう。

■浸種・催芽

猛暑で高温登熟した種子は休眠が深いため浸種初日の低水温は発芽率低下を招きます。必ず水温10℃以上を確保しましょう。

- ①浸種は、適温管理ができる屋内または日陰で行う。ハウス内での浸種は水温が高くなる傾向があるので絶対に行わない。また、直射日光による急激な温度上昇を避け、外部からの異物混入を防ぐため、容器には必ず「蓋(ふた)」をする。
- ②浸種桶には必ず温度計を設置し、水温を確認する。
- ③浸種は、水温10~15℃未満を確保できるよう3月28日頃から開始する。また、水温が低い場合は開始時にお湯を加えて調整する。低水温（5℃以下）は発芽率低下を招き、高水温（15℃以上）は「ばか苗病」の発生リスクを高めます。
- ④浸種期間は積算水温120℃（10℃/日×12日間）までとし、必要以上に長くしない。浸種水量は種子が露出しないよう十分な水量を確保する。消毒方法の異なる種子は同じ容器で浸種・催芽しない。（詳しくは裏面参照）
- ⑤催芽温度は30~32℃とし、温度計で必ず確認する。（催芽温度が低いと「ばか苗病」の発生を助長させます。）

■育苗管理

- ①育苗施設及び周辺では、稲わら、籾殻を使用しない。
- ②生焼けのくん炭を育苗床土に使用すると「ばか苗病」が発生しやすくなるので、完全に炭化したものを使用する。
- ③育苗期間中の温度は、出芽時（30~32℃）、緑化期（昼：20~25℃、夜：10℃以上）、硬化期（昼：15~20℃、夜：5℃以上）を目安とする。温度が高いと「ばか苗病」の発生が多くなるので、温度管理を徹底する（「ばか苗病」の発生リスクが最も高い温度は27~30℃）。

技、其の二 薬剤による種子消毒の方法！

種子消毒剤にはテクリードCフロアブルを推奨します。

※スポルタック乳剤は耐性のあるばか苗病菌が確認されております。テクリードCフロアブル剤を使用しましょう。

■テクリードCフロアブルの使用法

- ①水温は 10℃以上～15℃未満を厳守する。(10℃未満の極端な低水温での浸種は催芽や出芽の遅延、抑制が起きる場合があるので、お湯を加えるなどして水温を確保しましょう。)
- ②太陽光が直射する場所では、薬液の温度が上がったり、薬剤成分が分解したりするため、屋内または日陰で行う。
- ③薬液量は、種子乾粒重の2倍以上の容量を準備し、「よくかき混ぜる」こと。(乾粒 10kg の場合、20ℓ 以上の薬液が必要。)
- ④薬液の倍率は、水 100ℓ に対し薬剤 500 ml の 200 倍を厳守し、24時間浸漬する。(乾粒 50kg 分)
- ⑤薬液に浸漬する際は、各々催芽袋の中まで薬液が染み渡るように、4～5回ゆすって気泡を除いてから容器に沈め、24時間浸漬する。
- ⑥消毒終了後(200倍処理の場合)は、薬液の付着性と浸透性が高いため、すぐに浸種を行なう。
- ⑦浸種は、種粒の2倍の水道水(10kgあたり20ℓ)に静かに浸す。薬剤効果を安定させるために、浸種開始3日間は水の交換をしない。その後は3日に1回程度交換する。また、種粒に固着させた薬剤が落ちないように、水交換は静かに行う。
- ⑧浸種期間中は、循環式催芽機やエアレーション付きの水槽などを使用すると、黒色の粘性物が発生する場合がありますので使用しない(水を動かさない)。
- ⑨催芽機による「催芽」は、機器を過信せず必ず温度計を設置し確認する。

種子と一緒に配布されている『作業チェックリスト』を活用して「ばか苗病」の発生を未然に防ぎましょう！！

技、其の三 温湯消毒種子の取扱方法！

- ①温湯消毒後は直ちに水道水に浸種する。すぐに浸種できない場合は、再感染抑制のため、冷却後脱水し、通風乾燥で粒水分を15%まで低下させる。その後、播種日から逆算し適切な時期に浸種を開始する。
- ②浸種は、種子乾粒重の3倍以上の水道水(10kgあたり30ℓ以上)とし、雑菌が増殖しないように、2～3日に1回は水交換する。
- ③温湯消毒後の種子は無菌状態となっているため、その後の不衛生な管理や温度管理で「ばか苗病菌」が付着する可能性があるため注意する。
- ④温湯消毒と薬剤消毒を行った種子を併用する場合は「浸種・催芽・播種」は、別々に取り扱う。

※もち米は温湯消毒処理を行うと発芽率が低下する傾向があるので留意する。

技、其の四 気象変動に左右されない土づくりを！

管内の水田土壌pHは5.42(令和4年:分析数322点の平均)で、目標値【pH5.5～6.0】よりも下回っています。pHの低下は稲わらの腐熟を遅らせ、田ワキの原因となり、初期生育確保の妨げになります。また近年は高温・猛暑や低温・少照などの極端な天候が常態化しており、特に地力の低い圃場での稲の消耗が激しく秋の凋落や登熟不良が見受けられます。

当JAでは令和2年度から「土づくり支援対策」を行っております。下表の対象資材を活用し、積極的な土づくりで地力を向上させ安定多収をめざしましょう。

資材名	施用量(kg/10a)	税込参考価格(円/20kg)	備考
農力アップ	60	1,529	ケイ酸・苦土・微量元素を含有した新総合土づくり肥料
天の恵み14号	100	1,364	ようりんとケイカルが同時散布できる省力銘柄。混合割合は、ようりん1(20%)：ケイカル4(80%)
てんろ石灰(粗粒)	100	869	ケイ酸や微量元素を含む。主にpHの矯正を目的とし効果の持続性が高い
とれ太郎	60	2,772	リン酸・苦土・ケイ酸・石灰を含んだ総合的な土づくり肥料。

※春散布の場合は耕起前までに散布しましょう。

★次号の発行は3月11日です！